

パネル解説資料



“D”の遺址を紡ぐモノ

だいりゅういせきぐんちょうさたん
大龍遺跡群調査譚



軽石製岩偶



スিজガイ製利器



白薩摩香炉



茶入

関連イベント：展示説明会 ※無料

日時：11/23(土・祝)、12/15(日)、1/19(日) 全て13:30から30分ほど

2024.11.20 水 ▶ 2025.1.26 日

【開館時間】午前9時～午後5時 【休館日】月曜日(休日の場合は翌平日)、12月29日(日)～1月1日(水)

【観覧料】無料(ただし、常設展示は、小・中学生150円、高校生以上300円)

1 大龍遺跡群の周辺

はじめに

～大龍遺跡群の発掘調査の概要～

昭和二十六年（1951年）、考古学者の河口貞徳氏によって若宮神社境内（若宮遺跡A地点）が、その翌年には春日町遺跡A地点が発掘調査され、縄文時代中・後期（約5,500～3,300年前）の成果が得られました。春日町遺跡出土の縄文時代中期の土器は、同遺跡名を冠する「春日式土器」と名づけられ、学史に残る遺跡として知られることとなります。昭和五十年代に入り、大龍小学校の校舎や施設の新設・改築に伴う調査で、各時代の遺構・遺物が大量に発見されました。この頃、調査の主体は鹿児島市でしたが、県内各地の小・中・高校・大学の教諭や学生・生徒、考古学部・研究室の多大な助力を得て進められ

ました。このことが令和の時代まで続く市の文化財行政の礎を築き、その端緒となった遺跡が大龍遺跡群（大龍・若宮・春日町）だったのです（図1）。

大龍遺跡群周辺の地形

大龍遺跡群は、分布域の西半を占める大龍遺跡、東半北側一帯に位置する若宮遺跡、同じく東半部の南側一帯に位置する春日町遺跡によって構成されます。大龍遺跡群の西・北方向にはシラス台地が形成されており、その縁辺に接して東へ延びる低位段丘（台地との標高差約25m）上に立地しています。段丘北側は、東流する稲荷川に浸食されて急な傾斜となる一方で、段丘南側は海へ向かって緩やかに傾斜しています。段丘の基盤層は海に面する海浜性の砂州（図2）で、縄文時代、及び古墳時代の遺構は砂州状の微高地に形成さ

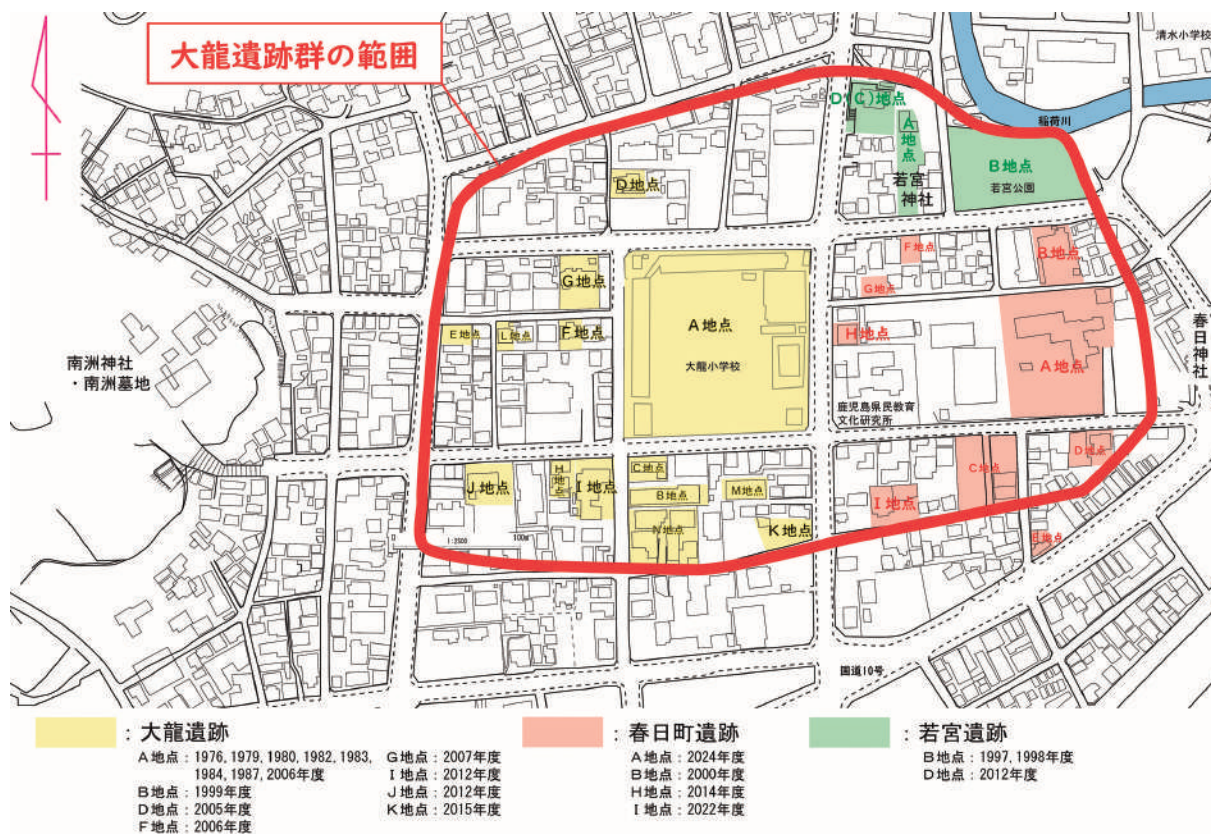


図1 大龍遺跡群における各地点の調査履歴



図2 春日町遺跡A地点の基盤層（砂州）

れています。なお、縄文時代の遺構・遺物はほぼ全域で確認される一方で、古墳時代については遺跡群西半（遺跡群では標高の高い地点＝約10m）が顕著となっており、土地利用の変遷がうかがえます。

大龍遺跡群と周辺遺跡との関係

「大竜町」の地名は、近世期に現在の大龍小学校敷地内にあった大龍寺^{だいりゅうじ}に由来します。「大龍」は島津家15代当主貴久^{たかひさ}の戒名・大中



図3 大龍遺跡群と周辺遺跡地図

と16代当主^{よしひさ}義久の号・龍伯を一字ずつ合わせたものになります。大龍遺跡群の周辺には、14世紀以降、当地を拠点とした島津氏に縁深い城跡や寺院跡が数多く知られており（図3）、必然的に、発掘調査では中・近世（13世紀～19世紀半ば）の遺構・遺物が全域で発見されています。一方、それより古い時代をみると、大龍遺跡群と年代的に重なる縄文時代の遺跡は周辺で確認されていません（台地上の遺跡は大龍遺跡群よりも古い縄文時代早期が主体）。同様のことは、古墳時代（3世紀後半～6世紀）についてもいえるため、大龍遺跡群と周辺遺跡との関係性は、島津氏の支配以前と以後で変化したと想定できます。

2 台地を背に海へ向いた人々

大龍遺跡群の縄文時代

大龍遺跡群では、これまでに発掘調査された全域において縄文時代の遺構・遺物が確認されています。遺構としては、^{たてあなじゅうきょあと}堅穴住居跡や土坑、集石（石を集めて火を用いた調理施設）が縄文時代中・後期の遺物を伴い検出されました。最も古い段階の遺物には、^{そ ばたしき}曾畑式^{ど き ふかうらしき ど き}土器や深浦式土器といった縄文時代前期の土器が該当し、主に遺跡群北半（大龍遺跡A・D地点、若宮遺跡A～D地点）に顕著な出土傾向を示しています。一方、縄文時代中期^{かすがしき ど き あだかしき ど き}の春日式土器や阿高式土器、縄文時代後期の^{いぶすきしき ど き いちきしき ど き}指宿式土器や市来式土器は各地点で確認され、特に後期の遺物の出土量が最も高い割合を示しています。なお、遺構・遺物が検出された砂州性段丘（砂層）の端部（その先は海）が春日町遺跡B地点で確認されていることから、海辺に営まれた縄文時代の生活の様子をうかがうことができます。

石器にみる縄文時代の生業

縄文時代の生業に直結する石器は大龍遺跡群でも確認されています。この内、狩猟用の矢先に付ける石の“やじり”（石鏃）は小型のものが中心で、素材には在地産（三船、^{かみうしばな}上牛鼻）、及び西北九州産（佐賀県の腰岳、^{こしだけ}長崎県の針尾）の黒曜石に加え、玉髓や安山岩が選択されています。また、動物の解体や植物の加工に使用する石匙・スクレイパー、伐開や土堀りに使用する石斧、堅果類を粉末にする石皿や磨敲石など、生活に必要な一通りの石器を確認できます。注目されるのが、漁網の“おもり”とする石錘（安山岩製）、軽石製の浮子、シカの骨を素材とするヤス（魚を突く）などの漁撈具が目立つことです。大龍遺跡A地点では、石錘が埋納された土坑（石錘を一括して保管した可能性）も検出されており（図4）、立地環境に即した生業が営まれていたと想定されます。

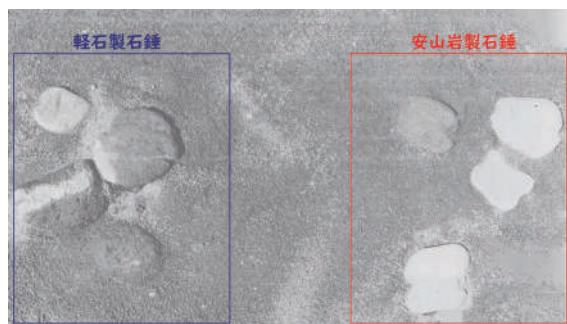


図4 石錘埋納土坑

軽石を用いた祭祀

祭祀とは、対象（“神”や祖先、自然など）を祀る・祈るための行為のことを指します。しかし、“モノ言わぬ”物質を扱う考古学において、出土品に精神性を見出すことは大変難しいといえます。一般的には、実用的な遺物（用途が判明している遺物：土器、石鏃、石斧など）とは一線を画す、用途を類推でき

ないもの、あるいは元の用途と明らかに異なる二次利用や意図的な欠損の痕跡が認められるものなどを祭祀遺物として取り扱っています。その中で、「何かを“模った”軽石製品」は縄文時代後期の祭祀遺物として頻繁に確認されています。大龍遺跡群では、人や魚の形をした製品（岩偶：図5）が出土しますが、鹿児島市南部の草野貝塚（下福元町）の軽石製品（獣や舟を模ったものが主）とは意匠が異なります。一方で、地域に関わらず穿孔、あるいはベンガラを塗布した軽石製品は共通して確認されます。これらの様相について、遺跡の環境や集団差を示している可能性があります（今後も比較検討が必要）。



図5 軽石製岩偶

3 集落で展開された“まつり”の痕跡

古墳時代の土器祭祀

縄文時代と比べ、古墳時代の遺構・遺物の検出範囲は限られており、遺跡群西半（大龍遺跡各地点）を主体として分布しています。その中心となるのが大龍遺跡A地点で、堅穴住居跡や溝、土坑などが多量の遺物と共に発見されています。この内、A地点南東隅の調査区からは、埋没後の住居に伴う土器群が検出されました。土器群の出土状況には特徴があり、上向きに並べた壺2点とひっくり返して並べた甕の脚台2点を対称に置き、周辺には軽石を詰めた壺や下半部のみを集めた甕、丹塗りの高杯、やはり対称に配置した埴など、日常生活に使用する器に特徴的な加工を施した6世紀代の土器を意図的に配置したものでした。埋没住居に伴っていることを踏まえて、住居廃絶に伴う祭祀行為の痕跡である可能性が指摘されています（図6）。



図6 土器祭祀遺構

4 大龍遺跡群の“断絶”の時代

大龍遺跡群における弥生時代と古代

縄文時代と古墳時代の遺物が大量に発見されている大龍遺跡群ですが、その間の時代にあたる弥生時代の遺物は極端に少なく、在地

土器の小片や石器類がわずかに確認されるのみになります。鹿児島市内において弥生時代の遺跡が確認される地域は、武・郡元地域（武遺跡・共研公園遺跡・一の宮遺跡）と谷山地域（不動寺遺跡・北麓遺跡）が主体になります。また、大龍遺跡群では古墳時代に続く古代（9～12世紀）の遺構・遺物も僅少に留まりますが、やはり、武・郡元地域や谷山地域で顕著に確認されています。これらの地域の遺跡は、地域における主要河川に近接した砂州性の微高地や低段丘面に立地している点で大龍遺跡群と共通します。大龍遺跡群内の未発掘地点、あるいは大龍遺跡群周辺で弥生時代や古代の遺構・遺物が眠っているのかもしれない（図7）。

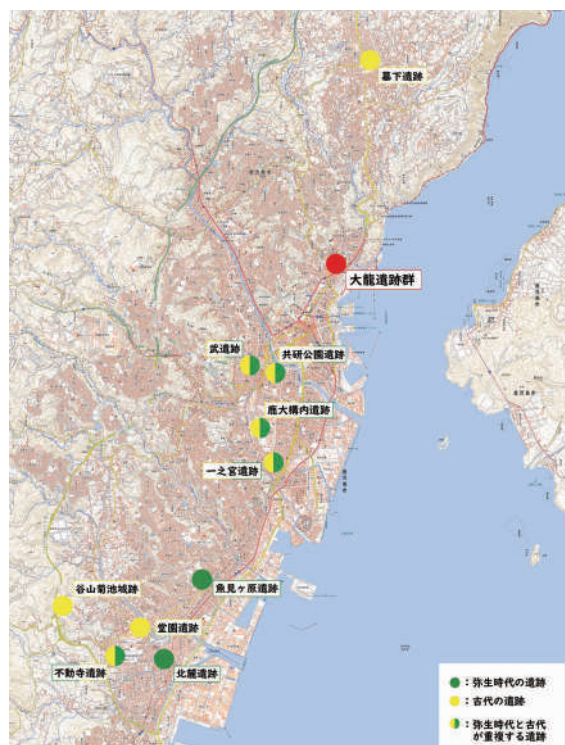


図7 弥生時代と古代の遺跡分布図

5 島津氏の進出から繁栄の道程

【上町地区】における中世と島津氏の躍動

大龍遺跡群が位置する一帯は、現在の鹿児

島市の行政区分で【^{かんまち ちく}上町地区】と称されています。江戸時代、鹿児島城前を境に“上”と“下”に分け、それぞれにおける武士の居住空間を“^{ほうぎり}方限”（^{かみほうぎり}上方限・^{しもほうぎり}下方限）、町人の居住空間を“^{かんまち}町”（^{しもまち}上町・下町）と定めたことに由来します。大龍遺跡群が所在する一帯は本来、“上方限”に当たりますが、今日では本来の“上町”と合わせて【上町地区】と呼ばれているのです。さて、11～13世紀にかけて、当地は鹿児島郡司の^{やがみし}矢上氏や同族の^{はせばし}長谷場氏の支配下にありました。^{りやくおう}暦応四年（1341年）、島津家5代当主^{さだひさ}貞久は長谷場永純を攻め、その居城・^{とうふくじじょう}東福寺城に入城します。以降、島津宗家の拠点は東福寺城から^{しみず}清水城、内城へと移り、それに伴い【上町地区】は「鹿児島の初期（中世）の城下町」として発展しました。

藩政期前夜の島津氏居城と城下町の優品

大龍遺跡A地点の場所^{てんぶん}に天文十九年（1550年）に築かれたのが内城です。島津家15代当主^{たかひさ}主貴久により築城され、戦国時代真っ只中の16世紀後半における島津氏の居城となりました。それまでの「背後の山城+麓の屋形」という城構えとは異なる、初の^{ひらじろ}平城（^{こうじょうてき}恒常的城館）で、鹿児島城築城までの約50年間、島津氏の拠点として機能し続けました。発掘調査では、近世以降の土地利用の影響から遺構はほとんど発見されませんでした。しかし、内城時代の瓦や^{せい か じ き}青花磁器（中国産の染付磁器）、国内産陶器（^{びぜん や き}備前焼、^{とこなめ や き}常滑焼）が出土しています（図8）。また、大龍遺跡群全体でも、12～16世紀に位置づけられる中国産の輸入磁器（^{せい じ}青磁、^{はく じ}白磁）が大量に出土しており、城下町の隆盛と^{みなと}湊（遺跡群東端の^{かすが}春日神社近辺にあった）を利用した優れた物流の

存在を物語っています。



図8 大龍遺跡群出土の中世後期の遺物
上：備前焼大甕（16世紀）
下：平瓦（16世紀末～17世紀初頭）

6 武士が闊歩し寺社が坐した 往時の余薫

江戸時代の【上町地区】の町並み

^{けいちよう}慶長五年（1600年）の^{せき が はら}関ヶ原の戦いに敗れた島津家は、本領安堵に向けた様々な交渉を行う一方で、臨戦態勢もとかず、敗戦直後から新たな本拠・鹿児島城を城山とその麓に築きました。これを機に“上”と“下”、“方限”と“町”という新たな“城下”が形成されていくことになります。上方限には、島津家の^{ぼ だ い じ}菩提寺・^{ふくしやう じ}福昌寺（^{そうとうしやう}曹洞宗）、^{き が ん じ ょ}同家祈願所・^{だ い じ ょ う い ん}大乘院（^{しんごんしやう}真言宗）、^{じやうこうみやう じ}浄光明寺（^{じしやう}時宗）といった領内の各宗派の筆頭寺院や、藩主の崇敬厚い「鹿児島五社」（^{か こ し ま こ し ゃ}諏訪・^{す わ}八坂・^{や さ か}稲荷・^{い な り}春日・^{かすが}若宮）などの神社が数多く並び建ちま

した。かつての島津家の拠点・内城の地には、
慶長十六年（1611年）、大龍寺（高僧・文之
玄昌を開山とする臨済宗寺院）が建ち、これ
らの寺社と隣接して武家屋敷が整然と並んだ
様は、現在も土地の区割りとして【上町地区】
に見ることができます。

絵図に描かれた大龍遺跡群

てんぼうねんかん
天保年間（1830-43年）の初期に描かれた
とされる『天保年間鹿児島城下絵図』は、鹿
児島城を中心に据えて南東方向から城下全体
を鳥瞰し、屋敷や社寺などが朱注と共に描写
されています（図9）。巧みな彩色をもって
精細に記された情報は、近世・鹿児島城下の
調査・研究において頻繁に援用される貴重資
料として位置づけられています。絵図中の大
龍遺跡群の位置は、現在と同じ流路が描かれ
いなりがわ じょうこうみょうじ なんしゅうぼ ち
た稲荷川や浄光明寺（現在の南洲墓地）との

位置関係から比定が可能となっています。絵図には、内城の地に創建された大龍寺、現在と同位置にある若宮神社、島津一家（藩主直系の子孫を当主とする四家）の重富島津家しげとみしまづけや今和泉島津家いまいずみしまづけの屋敷などが描かれており、大龍遺跡群各地点の歴史的な位置づけに関する有用な情報を提供してくれています。

はんよう
藩窠で焼かれた“やきもの”

大龍遺跡群検出の近世の遺構には、水道^{すいどう}石管^{せつかん}（埋設して給水・排水に利用した石製水道管）や地業^{じぎょう}（建物の基礎）、石組み井戸、墓地などが含まれ、いずれも『天保年間鹿児島城下絵図』にある屋敷や社寺に伴うと考えられます。また、近世の遺物は市内屈指の出土量を誇り、当地がいかに隆盛していたかを窺い知ることができます。出土遺物に顕著^{しょうさつ}だったのは、白薩摩^{しろさつま}（白色素地に透明釉を施^{とうめいゆう}

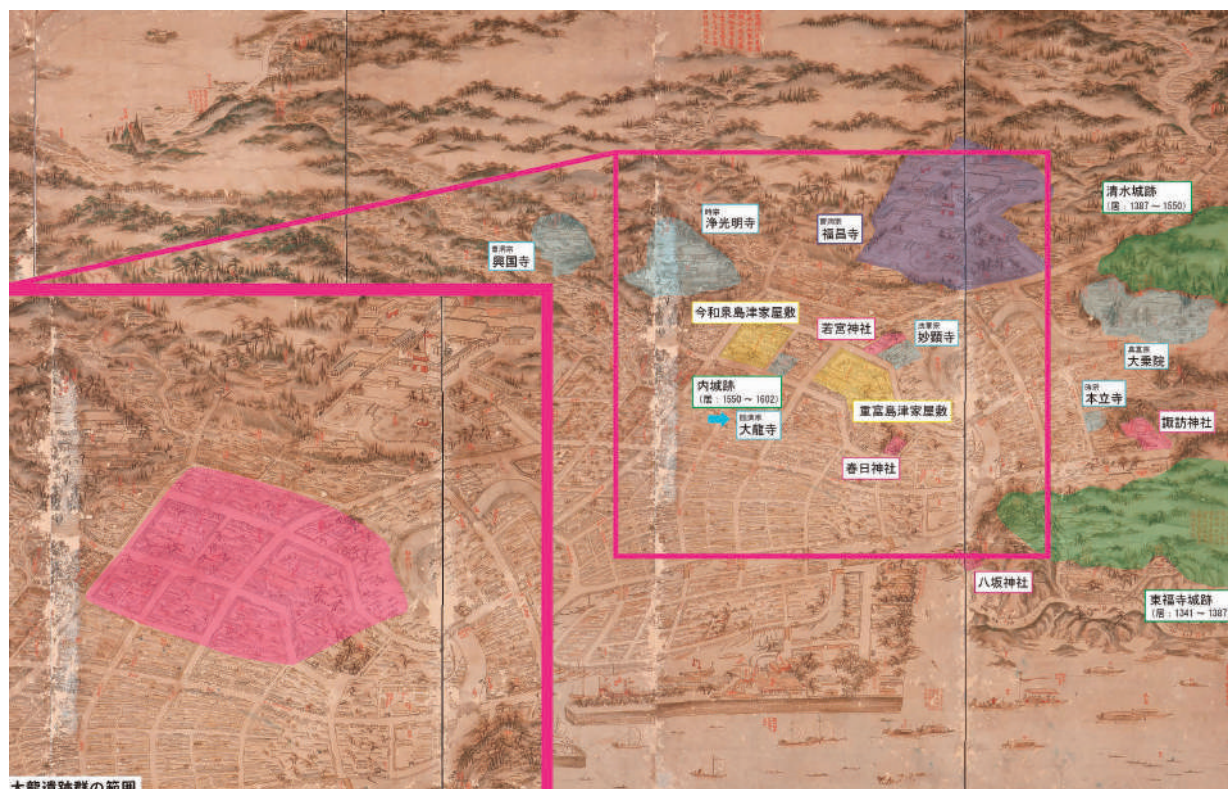


図9 天保年間鹿児島城下絵図における【上町地区】の施設と大龍遺跡
原資料：「天保年間鹿児島城下絵図」（部分）鹿児島市立美術館所蔵

した陶器^{とうき}）や象嵌陶器^{ぞうがんとうき}（素地と異色の粘土を埋め込み模様を表す：図10）、宋胡録写^{すんころくうつし}（タイ中部の製品を模倣した鉄絵陶器^{てつえ}）など、藩窯^{はんよう}（薩摩藩が直接経営した窯）である堅野冷水窯^{かたのれいすゐ}（冷水町）の関与が想定できる製品でした。このことは有力武家や寺社が藩窯に直接発注していたこと、物流の上で産地と消費地が近接していたことを物語っています。



図10 白薩摩碗に象嵌された家紋

“有力者”に愛された茶の湯の道具

15世紀以降、南九州の中世の山城^{やましろ}や居館跡^{きょくあんあと}からは、大量の中国産輸入陶磁器と共に、天目茶碗^{てんもくちやわん}や茶臼^{ちやうす}といった“茶の湯”（平安時代末期に中国から伝来した喫茶の習慣を端緒に、道具や作法の面で日本独自に発展した文化）の道具（茶器）が出土しています。その後、慶長の役（1597-98年）を機に渡来した朝鮮人陶工の手で薩摩焼生産が始まると、島津家17代当主義弘^{よしひろ}が創出した薩摩の茶入^{ちやいれ}（抹茶粉を入れる器）が重宝され、政治における贈答品としても活躍しました（図11）。大龍遺跡群では、17世紀以降の茶入や茶碗類、



図11 茶入

風炉・釜^{ふろ かま}（湯を沸かす器）、建水^{けんすい}（残った湯を捨てる器）などの茶器が確認され、多くは藩窯産の薩摩焼と同様、一門家の屋敷や大龍寺^{だいりゅうじ}、妙顕寺^{みょうけんじ}（法華宗寺院としては藩最大の寺領高^{じりょうだか}）などの有力寺院に比定可能な地点からの出土でした。

近世遺物にみる生活感① 飾る

近世に位置づけられる大龍遺跡群の出土遺物からは、現在と変わらない「人間の生活感」を感じることができます。江戸時代の女性の化粧には、白・赤・黒の三色を基調とした様々な種類が存在していました（肌を白く見せる「白粉^{おしろい}」、唇や頬を赤く染める「紅^{べに}」、歯を黒く塗る「お歯黒^{はぐろ}」）。大龍遺跡群からは「紅」の容器（保管も兼ねる）である紅皿^{べにざら}が大量に出土しており、中には当時の“ブランド品”（商標である「小町紅」が染付された猪口^{ちょこ}）も出土しています（図12）。この他、整髪に使う水や油を入れた容器（髻水入れ^{びんみずい}、油壺^{あぶらつぼ}）、結髪あるいは装飾に利用した簪^{かんざし}、「引眉^{ひきまゆ}」（既婚女性が眉を抜きその上で薄墨^{うすずみ}を

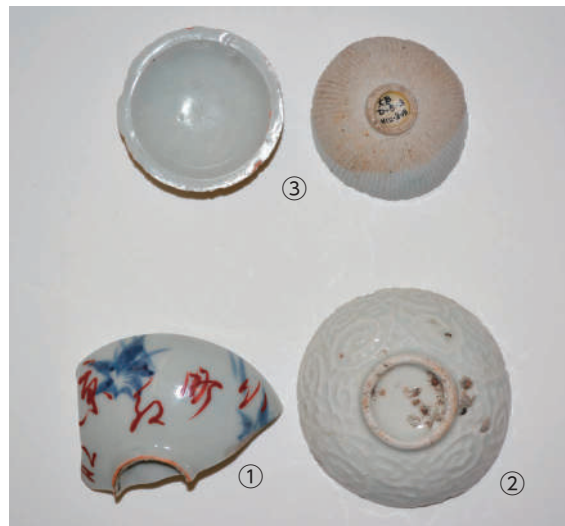


図12 紅皿

- ①：「小町紅」銘磁器（18世紀末～19世紀中頃）
- ②：蛸唐草文型成形（19世紀後半）
- ③：貝殻状型成形（18世紀後半～19世紀中頃）

引く化粧の一種）に使った青銅製の毛抜きなどがみられます。“美”を追求した近世の人々の姿が出土遺物に垣間見えます。

近世遺物にみる生活感② 書く・造る

大龍遺跡群では、近世の土師器や陶磁器に文字が墨書きされた資料が確認されています。その大半は、使用者の名前、入手した年月、使用する場所（遺物が帰属していた施設）の明記が目的の墨書と考えられ、出土地点の性格を考える上での重要な材料となっています。墨書資料以外にも、山口県下関（旧称、赤間関）産の硯や朱墨が付着した小型硯、墨を磨る際の水を入れる容器（水滴）など、字を書くための道具も多く出土しています。この他、近世期における生産活動を示す遺物として、鞆羽口（炉と鞆をつなぐ送風管）や坩堝（金属の溶解に使用する容器）といった鍛冶関連遺物も一定数確認されています。製品の補修や簡単な部品製造が屋敷の片隅で日常的に行われていたことを示唆する資料といえます。

屋敷の祀り、寺の祀り、社の祀り

大龍遺跡群の近世の出土遺物には、縄文時代の軽石製品と同様、祭祀に関連すると想定されるものが一定数確認され、特に素焼きの製品（土師器）に多い傾向が見受けられます。耳の形に似る耳皿（正月や婚礼などの儀式で使う箸置き）は市内でも突出した量が確認されますが、地点ごとに耳皿の造りが異なることが分かります（図13）。また、焼成後に穿孔された土師器や“口”同土を合わせて土坑に埋めた土師器（子の成長を願い胎盤を入れる胞衣壺か）は、屋敷跡地や神社隣接地でのみ出土しました。一方、吉兆を模った土

人形は遺跡群全体で偏在することなく確認され、墓に関わる資料（墓石、蔵骨器、古銭の束など）は寺院に比定される地点に顕著な傾向を示しています。このように、遺跡地の性格によって、選択された祭祀具が異なっていたと想定されます。



図13 耳皿

大龍遺跡群に搬入された近世の品々

素材や形状、用途を異にする多種多様な近世遺物には、在地産ではなく他地域から流通した遺物も数多く含まれています。その筆頭（ひぜんけいかまば）は肥前系窯場産の陶磁器で、大龍遺跡群においても染付磁器の大皿など優品が屋敷地を中心に出土しています。一方、特徴的な出土状況を示すのが、「堺喜多九郎兵衛」刻印の瓦



図14 畿内地方からの流通品

左：「堺喜多九郎兵衛」刻印の軒平瓦
右：「泉湊伊織」刻印の焼塩壺

や「泉湊伊織」刻印の焼塩壺やきしお づぼといった「上方」かみがた（畿内地方）の屋号やごう（商標しょうひょう）が付された搬入品（図14）で、遺跡群東半の春日町遺跡や若宮遺跡に偏在する傾向を示します。これらの地点には、稲荷川いなりがわの水運や中世以来の港かすがじんじや（春日神社付近）に近接することとの関係が想定されます。この他、市内でも頻出する琉球産りゅうきゅうの壺つぼや花鉢はなばち（植木鉢うえきばち）、瓶びん（泡盛あわもり瓶・徳利とっくり）も多く出土しています。大龍遺跡群の遺物の出土傾向は、上級武家社会に根づいた物流の一端を如実に物語っています。

7 激動の時代を遺物が語る

近代化への転換と変化、戦争の“刻印”

明治維新めいじいしんを迎え、世の中の政治、経済、産業、文化、教育などあらゆる面で近代化が進み、内実が変化していきました。それは遺跡の出土品にも顕著に反映されています。藩窯はんようが担った白薩摩生産しろさつまは、島津家所有の窯場かまばに加え、民間の製陶業者せいとうぎょうしやでも盛んになります。主に朱色の文字で生産者の号が染付された製品は、大龍遺跡群でも多く確認されていま

す。なお、商標の付与は、容器が陶磁器からガラスへ変化した明治～大正時代においても顕著に確認されます。時代は進み、戦争の足音が聞こえてきた1930年代以降、国の産業さんぎょう統制とうせいがしかれ、製陶業も大きな制約（原料・燃料の節約に伴う生産調整）を受けて、業者ごとの販売品目・数量が指定されました。その証として生産者別の表示記号が付された統制陶器とうせいとうき（図15）は、戦争の影響を示す考古資料の象徴といえます。

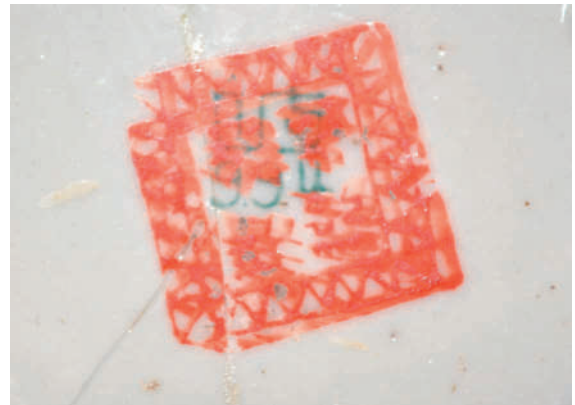


図15 生産者別表示記号「岐994」の磁器
「岐994」：岐阜・駄知陶磁器工業組合
本資料は後から「馮銓製造」の朱印が押印される

令和六年度特別企画展

「“D”の遺址を紡ぐモノ

—大龍遺跡群調査譚—」パネル解説資料

発行 鹿児島市立ふるさと考古歴史館

（公益財団法人 かごしま教育文化振興財団）

発行日 令和7年3月25日